

聖書との再会

佐伯 理奈

私は、幼稚園から高校までカトリックの女子校で過ごした。現在 18 歳である私の 14 年間は、校内のいたるところにイエス様とマリア様の絵画や彫像が見かけられ、ミサとお祈り、聖歌や聖書が日常に溶け込んだ、まさに神様を身近に感じられる毎日だった。そんな私は、この春、大学に進学した。今までと全く異なる環境に身を置くと、お祈りすることも聖書を開くことも一切なくなってしまった。我ながら呆れてしまうくらい「カトリック教育はどこへやら」であった。

大学入学から 3 カ月後、私は課題レポート作成のため、自室の本棚で資料を探していた。背が高い地図帳や資料集の間に立つ、小さな聖書の姿が見え、ふと手に取った。年季が入った聖書をパラパラとめくると、ページの間からノートの切れ端がするっと落ちた。そこには、授業中に友人とこっそり交わしたメッセージがしたためられていた。

一瞬で、あの日にタイムスリップした。

太陽の優しい光が注ぐ教室や、風が運んでくるどこかの金木犀の香り、クラシカルな制服を着た私たちが、先生のちょっとした言い間違いにくすくす笑う。私と隣の席の友人は、授業とは全く関係のない話を同じ切れ端に書き合っていた。「ああ、懐かしい」と微笑むと同時に、ふいに涙腺が緩んだ。

実は、このときの私は少し無理をしていた。そんな自覚があった。大学という新しい環境に新しい仲間、初めて取り組む学問と語学、そして、初めての感情。楽しいけれど、充実しているけれど、慣れないことの連続で毎日がてんてこ舞いだった。聖書を開いたとたん、私の前に神様が静かに現れ、「大丈夫だよ」と温かく包んでくださった気がした。ノートの切れ端が挟まれていたのは、偶然にも「放蕩息子のたとえ」のページであり、家を飛び出し、すべてを失った息子を父が抱きしめて迎えるあの場面だった。神様はずっとそばにいてくださったのだと気付き、胸が熱くなった。

その夜、卒業式の日にいつも通り「またね」と別れたきり途絶えてしまっている、あの隣の席の友人に SNS で連絡をした。「懐かしい！」「嬉しい！」と彼女から矢継ぎ早に返信が来た。まるで、あの日の切れ端のやりとりと同じように。短い時間にテンポ良く、何往復か交わし「また必ず会おう！」と結ばれた。それから数時間後、「本当に本当に、ありがとう」と彼女らしからぬ、しっとりとしたメッセージが改めて届いた。彼女も私と同じように、疲れていたのかもしれない。「良いタイミングで連絡したな、聖書のおかげだな」そう思った。

聖書は、決して戻れない美しい日々が神様の愛に包まれていたこと、そして、今も私のそばに神様がいることを知らせてくれた。そこに書かれた神様の言葉たちだけが尊いわけではない。聖書という存在 자체が神様から私たちへの贈りものであり、御守なのだろう。

今日も本棚の聖書に目をやり「行ってきます」と声をかける。この小さなお祈りが、私の新しい日課だ。